

書 評

大林太良著

『正月の来た道』

廣田律子[※]

本書は、東アジアを研究する者ならば非手がけたいテーマと視点の書である。しかし、整理分析するにはあまりに複雑で、生半かな知識ではとても書けるものではない。長年にわたり、数多くの広範囲なすぐれた研究をされている大林太良氏だからこそ、成しえた成果である。座右に置いて、繰り返し目を通し、研究の手引としたい名著といえる。

本書は、次のような構成で展開されている。

「年中行事は価値を失ったのか」は序論というべき章である。東アジアの諸文化に共通する正月のもつ観念、つまり「正月にあたって宇宙の秩序が更新され、太陽の年齢も更新され、自然はよみがえり、稲も家畜も人間も豊穡が約束される」(21頁)と、正月についての著者の見解が述べられている、興味深い導入部である。

第Ⅰ章「年中行事の仕組み」では、まず中国の年中行事を説明し、中でも上元と中秋を対となる行事として取り上げ、日本の正月と盆の対応と比較し、明快に分析している。

第Ⅱ章「生命の水、若水を汲む」では、新年の若水汲みについて、日本・朝鮮・中国の例を挙げ、中国については各少数民族また漢族の事例を扱っている。そして、華南における七月七日の聖水汲み、また華北・江南の六月六日の聖水汲みの例を挙げ、日本の琉球における、五月・六月あるいは八月・九月に若水を汲む習俗と比較を試み、六月と正月とを対応する時間の折目としてとらえられるべきであると分析している。脱皮型の死の起源神話について、日本・インドネシア・オセアニア・台湾・フィリピンの諸例を取り上げ、再生・

※神奈川大学経済学部講師

不死の観念の分析をも展開する。そして、若水汲みの起源を「生命の水の観念を基礎にして、中国高文化における新年の表象の影響下に、長江流域およびその南の水稲耕作文化において発生し、発達したものである」と結んでいる。(116頁)本章の構成は精密で、示唆に富んでいる。

第Ⅲ章「正月料理と八月十五夜の里芋」では、「年中行事のごちそうとは、一中略一生命の更新と活性化に役立つ食べ物であることが大事なのである。一中略一正月料理中の里芋、八月十五夜の里芋も、このような生命を与える食品なのである」とごちそうの意味を論じることから始めている。

(128頁)元來著者自身、焼畑文化複合の特徴としてとらえていた里芋だが、中国南部に見られる正月と八月十五日に里芋を食べる習俗を多数提示・解説し、その分布から「水稲耕作を行ういわゆる越文化にも受容され、そこで年中行事の体系に組み込まれて、はじめて正月と中秋との芋の供物と食用という習俗が確立したのではないかと、とても興味深い指摘を行っている。(150頁)さらに進めて、「中国南部において、正月と八月十五夜という二つの大きな年中行事の食品として確立してから、・・・日本に入った」と論を展開している。(152頁)

第Ⅳ章「新春の石合戦」では、朝鮮の石合戦のもつ軍事訓練また国家的行事としての性格から論じ、次にこの比較として中国の事例を挙げ、中国南方の民間レベルで行われる正月行事で、「豊穡儀礼としての性格と疫病を防ぐ機能が著しい」ことを明らかにしている。(171頁)著書は、「全体的にみて、水稲耕作文化との結びつきが考えられる。朝鮮と日本における農耕儀礼としての石合戦は基本的には水稲耕作複合の一部の豊穡儀礼として江南から広がり・・・」と想定している。

第Ⅴ章「新年の来訪者たち」では、まず日本の来訪者信仰や習俗についての研究成果を述べ、東アジアにおけるマレピト慣行へと展開分析を行っている。中国については、元旦あるいは二日に門付けに回ってくる形式と正月十五日に訪れる形式をわけて事例を挙げている。インドシナ水稲農耕

作民にみられるマレビト的性格を帯びた仮面舞踏の事例を挙げ、民族的共生や支配被支配の性格が存在するという興味深い指摘をしている。次に朝鮮における来訪者の慣行を分析し、「中国と日本に比べ、・・・独自の発展を示している」としている。(222頁) 結びの「マレビトの文化的背景」の中で、「東アジア全体の資料を眺め渡すと、日本のナマハゲ、中国の毛谷斯などをはじめとして、小正月に古いマレビト信仰がよく現れ、大正月には、日本でも中国でも職業的な、あるいは専門家の門付け芸になっているという傾向の存在が認められる」ときわめて重要な論考を行っている。

結びは「東アジア稲作文化圏からみる」で、本書の視点や意図が述べられている。Ⅰ～Ⅴ章で、年中行事の分析を通して、東アジアの水稲耕作地帯には共通する文化伝統が存在することについて明快かつ細微な論証が行われた。ここでは、特にこの中で重要な点を四点にまとめている。第一点は、日本・朝鮮・長江以南の三者間の関係の中で、朝鮮の独自性を挙げている。第二点は、「東アジアの水稲耕作地帯における年中行事の類似は、おそらく歴史的には何回にもわたる長期の交流の結果と思われる」「東アジアの水稲耕作文化が、照葉樹林帯という生態学的基礎に基づきながら、さまざまな歴史的要因によって絶えず内容を新たにしてきた」としている。(230・231頁) 第三点は、「若水汲みや、儀礼的食物としての里芋は、・・・焼畑地帯よりも、むしろ水稲耕作地帯に特徴的に分布していることが、明らかになった」とし「日本でも中国でも水稲耕作文化は、水田でとれた稲以外の、さまざまな栽培植物も含んだ体系」だとしている。(232頁) 第四点は、「行事の背景にある物の考え」を注目しなければならないとしている。(232頁)

あとがきにあるように、30年以上にわたって積み重ねられた、多方面・多地域の資料収集と細微な分析・研究の成果が本書といえる。大林氏の「いくつかの年中行事の特徴を比較することによって、東シナ海をめぐる地域の稲作文化の共通点に、何がしかの光を投じたい」(227頁) という意図は

ここにみごとに結実している。

本書を編むにあたって関連の数多くの事例を収集されているが、特に分布の全体像をつかむのに、著者が積極的に利用したとされる事典資料は、システムティックに確固たる研究視座をもって利用すれば、これほど多くを語ってくれるのだと痛感した。

本書の著者は第Ⅴ章で拙編者『中国の仮面劇』を引用して下さったが、筆者も中国をフィールドワークする者として、自分自身の体験と重ね合わせながら読み進むことができた。そこで、著者の論証にあてはまる資料の一つとして、江西省の漢族の追儺の祭りの事例を付け加えて紹介したいと考える。

江西省石郵村の旧正月1日から17日まで村の全戸が参加する祭りでは、祭りの全期間で、1日～15日は面を付けた神々が家々を祝福しに訪れ、簡単な劇を演ずる。16日・17日は、神々は家々を追儺に訪れるというようにはっきり二つの部分から構成されている。また豊作を占うことも行われる。つまり、大林氏の言われる大正月の門付けと小正月の来訪神とを兼ね備えた事例といえる。

年中行事を通じた本書のころみによって、東アジア水稲耕作地帯に共通する文化伝統がその巨大な姿を表わしはじめたといえる。

(A5版237頁 小学館 1992.)